

京鹿子

京都府立総合文化センター
京鹿子 2月号
発行所：京都府立総合文化センター



2月号

— 近 詠 —

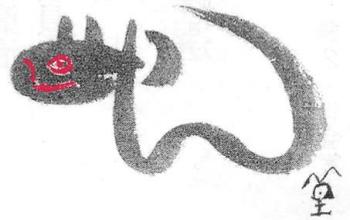
冬眠中 丸山佳子

思はざる至福に一封竹の春

菊花展に立礼すがし脚美人

文化祭の孔雀三羽に土産なし

いつの世も女はらしく水引草





ア
ン
ケ
ー
ト
に
一
筆
そ
ぞ
ろ
十
二
月

忘
年
会
へ
富
士
の
高
さ
の
ト
ン
ネ
ル
抜
け

冬
峰
の
望
遠
鏡
も
冬
眠
中

こ
の
木
ま
で
岩
を
枕
に
冬
眠
中

蛇
穴
に
わ
た
し
植
物
園
に
ひ
た
る

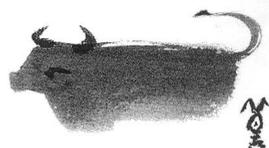
迎
春
す
鞍
馬
み
寺
の
宝
曆
に

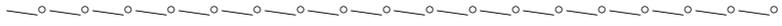


豊 田 都 峰

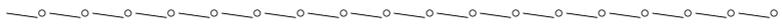
清響集 その九十四

黄落のそのひとひらになつてゐし
実生なる万両として日をはじく
万 両 や 山 陵 の 磴 苔 む して
ふ た み ひ ら 舞 ふ 小 春 日 の 里 林
ふ た み ひ ら 赤 き 木 の 葉 は 里 だ よ り
天 か ら の は は そ 落 葉 と 拾 ひ け り





川筋のゆどうふ窓をくもらせて
湯どうふの具を遊ばせてひとり酌む
一痕の月冴ゆ嶽を従へて
月冴ゆる木立はかげと徹しきる
月かげも及ばぬあたり蛇冬眠
赤燈がビルのかたちに年暮るる
賀状句
初日の出正調牛歩を願ひとす



秀華採集

神と人同じ旅寝や村祭

沼田巴字

神は客人（まらうど）であり、田作りのころになると田へ、稔りの頃になると村へやってくるという考えがある。そんな学説を思わせる神への接待が伺える「村祭」がよい。

櫟の実兄がゐさうで投げ返す

井上菜摘子

ふかぶかと月の寄せ棟造りかな

鎌田政利

亡兄へのせつないまでの思いが具体的な動作で表出、「寄せ棟造り」は大棟、ために「ふかぶかと」がふさわしく月で一段と影が深い。

鈴鹿 仁

雑煮椀

蕪忌の華やぐものに蒔絵筆
着ぶくれし己れの影の他人めく
人の世の不思議もありて虎落笛
虎落笛ないないづくしの唄となり
雑煮椀継がれ家宝の貌でゐる
歳取るは円くなること初昔
万両やことば色もつ禅問答

近 詠

宇都宮滴水

海女の里

むすめ海女一ときわ高く笑ひけり
破れ波止にあそぶ小波は夏のもの
さくら貝波の誘ひに気を赦す
涼しさのやはき目覚めへ舟戻る
夏の海旺日忘るる母の郷
波あそび姦まし子らは声濡らす
海女焚火貝のことより孫のこと

神麓集



新関一杜

きさらぎの墓石一群に迷ふのみ
 ふるさとに戻りて熱き納豆汁
 なくなりし祖父の座あけて囲炉裏端
 雪沓に入れやう赤き唐辛子
 大吹雪やみて黙せる樹氷林

落葉 柴田朱美

落葉舞ふ母のぬくみの火消壺
 ふところに落葉を溜めて競ひあふ
 脳細胞減りゆくばかり降る落葉
 朴落葉悲しいときは火を焚けり
 落葉飛ばしお国訛りの風が吹く

有 伊藤希眸

トルソーに有情紅葉の降りつづく
 山もみぢ有象無象として杖を
 晩秋や有酸素体操ぼてりぼたり
 有難し鏡のなかに曼珠沙華
 有事となそれ隼人瓜熟れてゐる

禰寝瓶史

こう鶴の餌嘴高く万歳す
 こう鶴の垂直離陸刈田風
 冬菜畑あつけらかんとブルが消す
 短日の時計の主張入院拒否
 投錨音今は昔の牡蠣の海

船越美喜

ふるさとへ帰り笛ふく村祭
 露散るや幸せといふ脆きもの
 知りつくし知らぬがほとけ藪虱
 たあいなく暮れ立冬の星生まる
 たそがれの音ともならず冬の雨

冬 隣 荻野千枝

しのび寄る秋冷よわひ重ねつつ
 コスモス満つ恋なき老の恋ごころ
 花八ツ手グーチヨキパーのパー好み
 わが星はジエミナよ秋の声ダブる
 政変の彼方あやふし冬隣

神麓集



喉 仏 丸 井 巴 水
 荒積みの石材が好き昼ちちろ
 髭剃つて師走の予定ひとつ足す
 骨の無き手袋と辞書鷲掴む
 十二月八日は尖る喉仏
 片頬へ刺さる寒波のなじみ橋

冬に入る 川崎光一郎

独居てふ自由不自由冬に入る
 禰宜ひとり鳩に豆撒く神の留守
 焼芋の熱さよ飢ゑし日の記憶
 枯れのなか磯馴れの松の孤高かな
 枯れてゆく木々を諾ふ風の唄

蘘 森 津 三 郎

沈床を敷き替えてる秋の晴
 柿に網かけつばなしの田舎かな
 慈姑まだ掘るには早い葉のやはさ
 好きなかだけ切つてお帰りコスモス園
 蘘のすくすく伸びる下校時

薄 命 松 本 鷹 根
 百舌鳥独り河は一途に黙を押す
 疏水果つ伏見に秋を滾らせて
 稲架のびる視界飛行雲に譲る
 冬隣影も持たずに祇園抜く
 薄命の淡く鮮やか帰り花

含紅抄 その四 沼田巴字

吊橋でこみあつてゐる紅葉山
 人は人己はおのれ柚子は黄に
 敗荷のかたちいろいろ最晩年
 弾丸を秘めてゐるなり冬の雲
 たがために鐘は鳴るなり枯れ蓮

小 堀 寛

七輪に熱爛こぼれ聖夜かな
 粗塩と一盞の酒聖夜かな
 鳶青年第九つらぬく冬の門
 泣派手の少女するりと歳の市
 クリスマスイヴ日本人ばかりかな

